江戸川大学国立公園研究所から

執筆担当：親泊素子

はじめに

世界の国立公園には、その傑出した大自然の景観美や固有の生態系を有しているという観点から、ユネスコの世界自然遺産にも登録されている公園がある。また、公園内の文化的価値が認められ、文化遺産として登録されている国立公園もある。ユネスコの世界遺産委員会は、これらの分類に加え、一九九二年に「文化的景観」の概念を導入した。この「文化的景観」とは、人間が自然とともに生み出した景観で、その自然的要素に特筆すべき点がある場合には、「文化的景観」として登録されるというものだ。そして自然と文化の両方の遺産の価値が認められる場合には複合遺産として登録される。ここに紹介するトンガリロやウルルーカタ・ジュタ国立公園は、ユネスコの「文化的景観」として登録され、かつ複合遺産としても登録された国立公園の代表事例である。

ニュージーランド：トンガリロ国立公園

ニュージーランド北島中央部に位置するトンガリロ国立公園は一八九四年に設立されたニュージーランド最古の国立公園である。また、世界で四番目に古い国立公園でもある。北島最高峰のルアペフ山、ナウルホエ山、トンガリロ山と連なるこれらの山々のピークは古くから先住民族のマオリの聖地であった。しかし、当時の酋長であったホロヌク・ティ・ヒュウヒュウ・トゥキノⅣはトンガリロの土地を巡る争いで政府軍に負け、やがてホロヌクの領地も分割協議に同意しなければ、強制的に没収される危機にさらされた。そこでホロヌクはニュージーランド政府にその土地を寄贈し、「不可譲の土地」として政府に永久に守ってもらうことを願い出て国立公園が設立されたのである。ホロヌクやその部族の意図は、政府に「共通の遺産」として差し出し、その地を完全に保護してもらうつもりであった。ホロヌクたちは聖地を手放すことによって聖地を守ろうとしたのである。しかし、政府は既に観光地としての活用を考えており、その後、ヨーロッパから動植物の外来種も導入され、さらに多くの面積が加えられ、現在では七九六㎢の土地が国立公園となっている。

国立公園の設立以降、観光客の利用が促進され、公園内にはトレイルやスキー場等が整備され、多くの宿泊施設も建設された。人々はトンガリロ河口までのトレッキングや冬のスキーを楽しむ。そのため、先住民にとって聖地として崇め奉っていた山々に人々が登山やトレッキングで踏み入ることに忸怩たる思いも感じていた。こうして先住民の聖地に対する信仰と利用者との軋轢が生まれたのである。政府も彼らの心情を理解し、「立ち入らないように」「登らないように」といった標識を立てはするが、観光利用の促進とマオリ族の聖地を守る信仰の間にまだ解決すべき問題があって、妥協点を見出すことは難しい。

トンガリロ国立公園の三山

ユネスコ「文化的景観」第一号

一九九三年にこのトンガリロ国立公園はユネスコの「文化的景観」の第一号となり、また、複合遺産として追加登録された。その理由は、従来の自然遺産としての価値だけでなく、マオリの信仰の対象地としての文化的価値が評価されたからだ。彼らの信仰によってつくりあげてきた「見えない遺産」(intangible values)の評価である。その結果、観光客がマオリ文化により関心を示し、トンガリロの山々に対する尊敬の念へとつながることが期待される。

オーストラリア：ウルル-カタ・ジュタ国立公園

ウルル-カタ・ジュタ国立公園はオーストラリア連邦ノーザンテ

リトリーにある国立公園で一九五〇年に設立された。当時の名前はエアーズ・ロック国立公園だったが、一九五八年にマウント・オルガが追加され、エアーズ・ロック－マウント・オルガ国立公園となった。一九八七年にユネスコの世界遺産（自然遺産）に登録されたが、アナング族のアボリジニ文化が見直され、一九九四年に「文化的景観」の登録とともに複合遺産として拡大登録された。

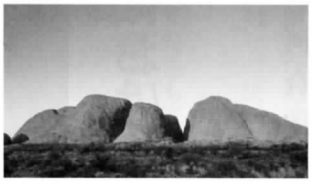
ウルルは周囲約九・四km、高さ約三四〇mの巨大な一枚岩で、世界で二番目に大きな岩である。このウルルから三〇km離れた大小三六個の巨石群のあるカタ・ジュタはアボリジニの言葉で「多くの頭」を意味し、ここもアボリジニの聖地として知られている。ウルルは鉄分が酸化した赤褐色の岩肌が特徴で、三万年前から先住民のアナング族の人々によって、彼らの聖地として大切に守られてきた。真っ赤に染まったウルルの岩は朝焼けと夕暮れ時に見られる特別な光景だ。

ウルル

ここでの観光客のハイライトはウルルへの登頂であり、ふもとには「登頂しないで」の標識があるのだが、入山料を払えば登ることが可能である。アボリジニの解説者は「昔ウルルに登れるのは祭司に限られていた。だが、今、私たちの信仰を理解せずに、観光客が勇んでウルルに登っていくのを見ると、自分の心が土足で踏み込まれるような痛みを感じる」と訴える。そして二〇一九年一〇月二六日、ついにウルル登山が法律で禁止された。この日はオーストラリア政府からこの一帯がアナング族へ返還され、三四年が経った記念すべき日でもあった。ついにアボリジニの願いがかなったのである。

「登らないで」の標識

エアーズ・ロック－マウント・オルガ国立公園は、一九九三年にウルル－カタ・ジュタ国立公園に名称変更された。それまではエアーズ・ロック／ウルルという二重表記で使用されていたのだが、二〇〇二年にウルル／エアーズ・ロックという形で順序が入れ替わり、同時にマウント・オルガ・カタ・ジュタも、カタ・ジュタ／マウント・オルガと表記されるようになった。



カタ・ジュタ

このようにウルル－カタ・ジュタ国立公園は、アナング族の聖地として認められ、現在はオーストラリア連邦政府と先住民族との協働公園管理が行われている。

おわりに

現在、日本には三五カ所の国立公園があるが、その中で世界遺産を含む国立公園は一〇カ所ある。屋久島、知床、小笠原国立公園の自然遺産に加え、二〇二一年には奄美群島、やんばる、西表石垣国立公園の三つの国立公園にまたがる「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」が世界自然遺産に登録された。また、瀬戸内海（厳島神社）、日光（日光の社寺）、吉野熊野（紀伊山地の霊場と参詣道）、富士箱根伊豆国立公園（富士山）は文化遺産として登録されている。これらの世界遺産の中で、現在ユネスコの「文化景観」リストに入っているのは「紀伊山地の霊場と参詣道」だけである。しかし、ほかにも聖地、霊山として昔から地域の人々によって守られている山々やパワースポットが日本の国立公園には多く存在する。それはかつての我々の祖先も自然は征服するものではなく、万物の霊が宿るものとして山、川、樹木、岩等が信仰の対象として崇拝されてきたからである。その結果、人々は畏怖の念をもって自然と接し守り育ててきた。日本の国立公園においても、今一度、国立公園の「文化的景観」となりうる聖地や霊山に注目し、ユネスコの複合遺産として推薦してみてはどうだろう。

（註）もう一カ所の日本のユネスコ「文化景観」に登録されたのは「石見銀山遺跡とその文化的景観」（二〇〇七年登録）

参考資料：
Dept. of Conservation, http://www.doc.govt.nz/>places, Tongariro national park
Parks Australia, https://parks.australia.gov.au/>uluru, Uluru-Kata Tjuta national park
UNESCO World Heritage Center, https://whc.unesco.org/list
環境省、http://www.env.go.jp

親泊　素子●おやどまり　もとこ
米ウィスコンシン大学大学院博士課程修了。国立公園協会研究センター長等を経て、一九九八年江戸川大学教授。二〇一七年から江戸川大学国立公園研究所客員教授。環境政治学専攻。